

街かど



街かどはみなさんのページです。みなさんからの投稿は必ず掲載いたします(一部省略する場合あり)。募集するものは、短歌、俳句、川柳、詩、随筆、絵画、イラスト、写真などの作品や町に対するご意見(テーマ、内容は自由)その他です。なお、匿名希望者は匿名としますが、編集部へは氏名をお知らせください。投稿、連絡先、黒崎町大野二八四三二一 黒崎町役場企画調整課 広報くろさき係 ☎七三三〇一

緒立のボー(サイレン)に思う

還暦農夫

いつも午前十一時と午後四時には必ず緒立のボーが時刻を知らせている。あまり知る人もないと思う。そこで、緒立のボーの沿革を調べてみた。

大正五年築千坊地内に横江下江排水機場が新設され時刻を知らせるボーが新設された。

昭和八年玄の新田地内(新潟市)に移転、昭和十三年非常時帯を報ずるボーとなり緒立地内に設置された。緒立地内の非常事態だけでなく空襲の警報、午前十一時と午後四時は今と変わらない。設置場所は緒立温泉浴場の屋上である。その後浴場は廃屋となり第一鳥居の松の枝に吊るされ現在は八幡宮宝物殿の屋上にあり、変らず時を知らせています。

わたしたちの青年期は大変有り難い懐かしいボーだった。その当時は腕時計などなく野良仕事はもっぱらボーと日没を便るより方法はなかった。今は自動車の騒音でよく聴えないだろう。またあまり必要もなくなっているようだ。時計付自動車などで不自由はない。それでも緒立のボーは休む日もなく時刻を知らせている。

ではこのボーはだれが鳴らしているのか調べてみた。初代は排水機場の機関長野沢七衛(故人)、緒立浴場の場合は保刈イシ(故人)、鷺尾三治(故人)、八幡宮宝物殿の場合は鷺尾年秀(故人)。現在は久住政治さん、八十九歳の高齢にもかかわらずがらばっておられる。緒立のボー

はなんと七十年間、一時も休むことなく時を知らせている。今は平和のボーにしか聞こえない……。



手づくり趣味の会の皆さんが十一月五日(金)、二万円を図書購入費として町に寄付されました。

家塚ハルさん(大野仲町)が十一月十二日(金)、香典返しの一十万円を社会福祉協議会に寄付されました。

高橋八郎さん(大野二ノ丁)が十一月八日(月)、衛生講座講師の報償金五二〇〇円を社会福祉協議会へ寄付されました。

短歌

短歌会

身傷者と旅行に行きし笠塚に酒酌む膳のアユのおいしき
宮田 ミイ

庭先の金木犀の咲きてより朝は早目に縁の戸をあく
平松清次郎

角田山写して広がる佐湯湖につがいの鴨の静かに泳ぐ
乙川 竹

良寛の弥陀仏の歌母の古稀に御風書きしをわが喜寿に刷る
柏 直樹地

広大な緑の周囲に異国風のキルン塔映ゆるウイスキー工場
泉井 ヨ子

青田見て入院せしが退院の日は刈田にてもみながら焼かる
酒井 庄平

もみじ山望めるからと食事時席をかわりし老夫婦あり
阿部 浄子

山寺に芭蕉の句碑のあるという山路たどればここは蟬塚
小出美喜子

五頭山に群生したる七かまど山の斜面に燃ゆるが如く
金内 セツ

夏の雲一幅の絵を見るごとく高くただよひ西にむかえり
石川恵美子

俳句

ひそみろし漆紅葉の燃えいてぬ
紅葉落ち水にそまりし雨上り
大根の種まく野婦雨上り
匿名希望

紅葉舞ふ渋谷の駅に孫を待つ
山荘の句会の一夜秋嵐
横木義男

秋日和園児の列の伸びちぢみ
宵やみに夕顔の花白く浮き
海津みきよ

中の口川の川舟も揺れた

帝都を救えぬ

②「悲鳴」というあだ名がつけられた

復旧作業に従事していた黒崎村救護団は逸見小学校に宿泊し宿泊していた。何泊めかの夜、昼間の作業の疲れでぐっすり眠っていた彼らは、グラッと突然大きな地震に襲われた。

震災発生後小さな余震は絶えず続発していたが、この時はそうとう大きかったらしく学校の運動場に積んであった机が崩れ落ちたという。

さて、夢うつつの一行は「ウワー」と大声で叫び裸足で外に飛び出した。その時、黒鳥の石田某という人が「ヒエッ」と情けない声で逃げ出した。

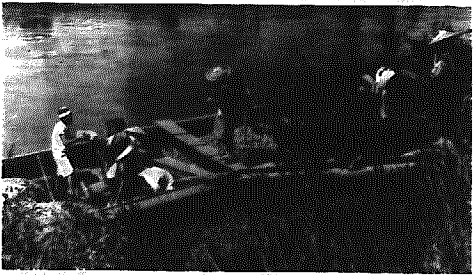
余震の後みんなはその悲鳴が余りにもおかしかったのでその男に「悲鳴」というあだ名をつ

けた。

帰郷してからも、名前と呼ばずに悲鳴と呼ぶようになってしまった。その男も初めは怒って無視していたが、あまりにたび

たび言われるのであきらめたのか、性格がひょうきんな人だったのか、言われるうちに悲鳴と呼ばれると返事をするようにになった。地震のおかげで変なあだ名をつけられる破目になったのである。(鈴木重二郎さんの話)

次に救護団の話ではないが、本町にまつわる関東大震災の工



▲コウレンボー

③関東大震災の揺れを安心丸の揺れと思つた。

大正十二年九月一日、この日は大野のお諏訪様の祭礼の日であった。町の若い衆五、六人が新地の浅妻与助さんのコウレンボー(米俵などを運んだ川舟)に集まっていた。

舟ではそれぞれが魚や野菜を持ちより料理して、さあ酒でも飲もうとなつて十二時ごろ突然コウレンボーが「ドスン」「ドスン」と波に打たれ物すごい勢いで岸におつけられた。

一同あわてふためきいったい何事だと驚いた。

最初は安心丸が白根丸(中の口川を運行していた蒸気船)の波のせいだろうと思つて廻りを見たが船などどこにも見えず、不信のまま舟を降り早々と帰宅した。

そして後で東京が大地震に襲われ壊滅状態であると聞き、ではあの時あの大波はその大地震であったのかと気づいたのである。

四回にわたつた「帝都を救えぬ」は今回で終了します。この話は岡田幸平さん、鈴木重三郎さん、阿部利平さんなどの協力を得ました。感謝しております。ありがとうございました。

黒崎町の昔



文・絵 宮田栄門

その十二

さて、夢うつつの一行は「ウワー」と大声で叫び裸足で外に飛び出した。その時、黒鳥の石田某という人が「ヒエッ」と情けない声で逃げ出した。

余震の後みんなはその悲鳴が余りにもおかしかったのでその男に「悲鳴」というあだ名をつ



新潟親子劇場

を養っていく場なのです。

子供の友情と創造性を育てる

創造性を育てる

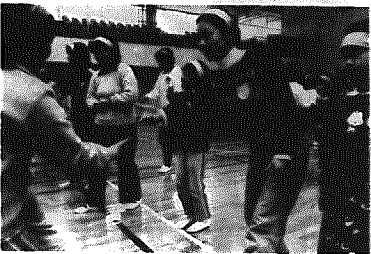
新潟おやこ劇場をご存知でしょうか。現在会員数二千六百名(内黒埼町二百二十名)発足して十年、子供に夢や友情を与えたい、創造性や自主性を育てたいとがんばってきました。

主な活動は

- ①年四回新潟市の県民会館や公会堂で舞台劇や音楽の鑑賞をしています。
- ②自然の中でキャンプやサイクリングを行っています。
- ③会費一人月六百円

鑑賞する作品は自分たちで決め自分たちの力で劇団や音楽団体などの創造団体を招いて生の舞台芸術を楽しみます。

自主的にみんなで計画し相談しあい実行します。楽しみ苦しみと共にし友情を育て生きる力



▲今年2月総合体育館で行った運動会

「森は生きていく」(演劇) 一月十九日(水) 六時〜九時
一月二十日(木) 五時〜八時
県民会館大ホール
現在、会員を募集中です。あなたも子供と一緒に入会してみませんか。

連絡は

坂井シズ子 七一六八九八
青木サヨ子 七四三三九二